

おけしらのひまわりと

西春人

装丁・カット

嘉屋重

順子

若い人びとに是非とも読んでほしい自伝です

——西 春人『おけらのひとりごと』推薦の言葉——

板倉 聖宣

素晴らしい自伝ができました。とくに若い先生方には是非とも読んでほしいと思って、推薦の言葉を書かせていただきます。

どうして若い人びとに読んでほしいのか。それは、「この自伝を書いた西春人さんが私の知っている人だから」というわけではありません。「この自伝に仮説実験授業のことが出てくるから」でもありません。「この自伝の主の人生が波瀾に富んでいて多くの人びとの興味をひくに足る」と思うからでもあります。この自伝には、「つい少し前までのごく普通の日本人、教師が歩んだ時代がとてもよく描かれている」と思うからです。

たしかに、西さんの特に戦前、戦時中の人生は、普通の人びとの人生よりもずっと波瀾に富んでいます。しかし、大きく見ると、西さんのそれらの体験も必ずしも特殊なものとは言えないと思うのです。戦前の日本人の生活は、この自伝にあるように、とてもきびしいものでした。西さんよりも十三歳（学齢でいうと十四年）年下の私は、中学校に進学させてもらい、敗戦のごたごたのお蔭もあって、大学まで進学することができました。しかし、私の八歳年上の次兄は、田舎の西さんが進学しえた高等小学校にも行かせてもらえず、西さんと似た苦労を重ねて、独学で夜間の工業学校に進学しています。いまから思うと、日本の社会は敗戦後とても急速に平等化し、豊かになってきたので、戦前の生活の貧しさや不平等のことは、想像するのも困難になっているのです。

しかし、日本の学校教育は、いまなお、そういう社会の変革に適合するものとはなっていません。敗戦後、日本の学校教育は量的に拡大し、教育の機会均等の条件はかなり確保され、「学習意欲さえあれば誰でも上級学校に進学できる」ようになってきました。しかし、「中学校や高等学校や大学に誰でも進学できるようになった」ということは、「へそういう学校さえ出ていけば出世が保証される」ということが無くなる」ということでもあります。そこで、「学校は今やっと、出世のためでない教育本来の目標を追求できるようになった」というのに、いまの学校教育は却って混乱する有り様になっていきます。そこで、「どうしてそうなったのか」考えなおすためにも、戦前の日本の社会と教育のことを考えてみる必要があります。そのためにこの自伝は多くのことを教えてくれると思うのです。昔は、勉強ができてても貧しくて進学できない子どもがいると、教師その他の人びとがどんなに親身になって励まし助けたか、この自伝は教えてくれるでしょう。それなのに、いまの教育にはそんな理想の世界を見出すことができなくなっています。みんなが出世のために励ましあっていた時代とは別の新しい教育内容や教育方法が準備されなければならないのではないのでしょうか。

この自伝には戦争中の西さんの軍隊生活のことも詳しく書かれています。ここには、西さんが当時どんなことを教わりどのように考え行動したか、ということが赤裸々に描かれています。西さんは敗戦後、広島の教師として平和教育に情熱を傾けるのですが、そういう人はとかく、「戦争中にどんなに戦争の被害を受けたか」ということばかり語りがちですが、西さんは、戦争にのめり込んでいった自分の行動を詳しく記録してくれています。一部の人が「大東亜戦争」に加担したのだから、あんな悲惨な結果にはならなかったのです。この部分は、「大東亜戦争と日本人」について考え直す上で、重要な教訓となるのではないのでしょうか。

私はこれまでにたくさんの伝記や自伝を集めてきました。教育史や科学史、社会史の資料とするた

めです。しかし、他人の手になる伝記は、長く名が残るような有名人のものに限られ、自伝も功なり名を遂げた有名人のものが大部分です。そういう有名人の伝記だけでは、各時代の庶民の生活と思想を見ることは困難です。それに、近い時代を生きた人びとの自伝や伝記を手にするのは困難です。最近は無名人人びとの書いた自伝も自費出版されるようになったので、古書店などで見つけると買ってきたりするのですが、自分の自慢話や言い訳話ばかり書いてあるものが多くて、そこから（その時代に生きた人びとの生き方や思想）をあまり読みとることはできません。

さいわい、西さんは文学青年でもあり、すぐれた教育者でもありました。そこで、この自伝には、自分を飾らずに、客観的に見つめるすぐれた視点があり、筆者を直接知らない人でも読み続けたくなるような魅力に富んでいます。だから、私は安心して多くの人びとに読んで頂くことができると思っています。とくに、戦前や戦争中のことを知らない若い人びとに読んで頂きたいのです。読んで頂ければ、ふつうの歴史の本に書かれているとはまったく違う（生き生きした現代史）を頭に描くことができるようになると思うからです。

それにしても、「見も知らない無名人の自伝なんか読む気にならない」という人もいることでしょう。しかし、じつはこの自伝の主「西 春人」という人は、仮説実験授業の歴史の中では、ちよつとした隠れた有名人でもあります。仮説実験授業の（自由電子が見えたなら）という授業書には、「仁丹（またはアラザン）は電気をよく通すか」という有名な問題がありますが、その問題を発掘したのは、ほかならぬ西さんだからです。私は、西さんのことを現職のころからよく知っていました。そして、当時広島大学におられた城 雄二さんを通して、その「仁丹」の問題のことを知ったのですが、その問題を聞いたとき、「さすが西さんだ」と思いました。仮説実験授業を受けた子どもた

ちはしばしば天才的な発見をするものですが、そういう子どもたちの大発見を大発見として認識して、それを広めることは、すぐれた教師でなければなかなかできないことだからです。私は、そういう大発見をする子どもたちを育て、みずからその発見を大発見として知らせてくれた西さんのような人を友人とし得たことを誇りに思っています。その発見の過程を含めた仮説実験授業と西さんとの関わりについても、本書の第三部に書かれています。

この自伝の第一部を、みずから編者を買って出た佐伯さんから送って頂いたとき、すぐに「これは面白い有益な伝記だ」と思いました。そして、佐伯さんに「最後まで書いてもらって、キリン館から出版できるようにしてほしい」とお願いしました。本書の巻末に載っている「年譜」は、そのとき私が本文をよりよく理解するために作成したものが元になっています。その後、第二部を送って頂いて、ますます多くの人びとに推奨したくなり、今度、最後の第三部を送って頂きました。ところが、今度はいいにくとても忙しいときに重なり、原稿を受け取ってから読み始めるのが十五日も遅れてしまいました。そのため、本書の出版が予定よりも遅れてしまったのではないかと心配しています。最近の西さんは健康を害されて、入退院をくりかえしておられるとのこと、心配です。

西さん、病身を押しての得難い貴重な伝記の執筆、有り難うございました。また、西さんを励まして、これだけの自伝をまとめて下さった佐伯俊典さん、出版元の〈いど出版〉のみなさんとキリン館の岡田哲郎さん、有り難うございました。

西さん健康を回復されて、いつかお逢いできるのを楽しみにしています。

「人間というものは一生の間に本を一冊は残しておく、という気持ちで勉強すること。それを目標にして勉強するように」

私の恩師、和村先生がよく言われた言葉である。先生も何か少しずつ書き溜めておられた。見せてもらったことがあるが、吉田松陰の「士規七則」だった。先生は熱烈な皇国史観の人だった。だから「士規七則」も勿論先生の皇国史観によって裏打ちされていたことはいうまでもない。ところが敗戦によって歴史観は百八十度回転した。もはや「士規七則」はアナクロニズムの泥土にまみれてしまった。先生の胸中察するに余りある。時々会う先生は老人会の世話などして目に見えて無気力になってしまわれた。

「わしにはもうすることがなくなつたよ」と言われたことがある。

「君はまだ若い。何か本にして残せるように努力してみるんだね」

しかし私には何も残せそうなものはなかった。何かせめて子や孫にだけでも「私はこれだけのことをやつたんだ」と威張れるようなものを残せたらと思うだけだった。

そのころだったと思う。広島大学の理学部に六か月内地留学して地学を専攻した。しかしここでも得たものは少なかつた。ただ若い大学院生とふたりで、山登りをして地質図を作ったり、廃坑の穴の中にもぐり込んで珍しい鉱石を捜したり、それらの薄片を作ったり、特異な経験を積んだことは、以後の私のプラスになつたことも多い。

それが、「探究の科学」「科学の方法」という「理科教育」に反撥して、教組教研に走る原動力になった。そしてその場で、広島大学の「城雄二」先生との運命的な出会いとなったのである。城先生はそのころ、板倉聖直先生の「仮説実験授業」に取り組んでおられた。やがて「広島仮説実験授業研究会」（ひろしまいどの会）が作られ、私も参加した。

リーダーは勿論城先生で、定例会の会場は大学の城先生の研究室である。狭い上にあまりきれいとはお世辞にも言えない研究室に集まる人がだんだん増えてくる。昔先生の世話になった若い人が多い。なかには片道何時間もかけて、県北部から車で来る人もいた。児玉さん、松田さん、出口さんなどである。県北の人は教組活動に熱心な人が多く、彼らと何度となく全国教研に出たものである。

板倉先生を広島にお招きして何度も講演を聞いたし、授業書は次々とやった。子供たちが夢中になって喜んで以上に私自身が完全に仮説の虜になってしまっていた。（宇宙への道）が終わったとき、太陽系の模型を作ろうということになって、広い校庭——端から端まで百二十メートルの一端に直径一メートルの真つ赤な太陽を作った。反対の端に地球、これはバチンコ玉、月はまち針の頭である。出来上がった時の子供たちの喜びは大変なものだった。それというものもこの模型は殆ど子供たちが作りあげたものだったからである。

退職して少しして「いどの会」の佐伯さんから「仮説実験授業との出会いから経過を書いたらどうか」という話があった。仮説についてのいろいろな研究は全国の熱心な会員の発表があり、毎年のレポートは正に汗牛充棟と行っていいほど集まる。その中に私の貧弱な実践記録など恥ずかしくて出せるものではない。

しかし、ここで和村先生の言葉が浮かんできた。私の幼時からの経過は決して自慢するようなもの



ではない。それどころか貧しさと、ともすればひねくれそうになる逆境の中から、どうにか這い上がった一生であった。あの和村先生の温かい言葉を胸に自分の一生を書き尽くしてみよう。せっかく佐伯さんも熱心に勧めてくださることだし、それに私の教員生活に胸を張って誇れるような、仮説実験授業の指導をして頂いた板倉先生への感謝の意を表すためにも是非書き残しておきたい。

さて書こうとすると、幼い時から現在まで私に関わって、私の今日をあらしめてくれた人々の面影が走馬灯のように目の前に現れてくる。

とにかく書いてみよう。恥も外聞もみな振り切つて。

板倉先生、城先生、佐伯さん、いどの会の皆さん。長い間ありがとうございました。

この拙い一本を、今は亡き恩師和村先生の霊前に謹んで捧げます。